

# 学 習 の 4 本 柱

— その理念と応用 —

**The Four Pillars of Education**  
- Theory, implication and Practice -

Prepared and presented  
by  
F SHINOHARA, Tokyo Gakugei University  
at  
Plenary Session  
10:50-11:50hrs  
18 December 2006  
Japan Center  
Ulaanbaatar, Mongolia

the Four Pillars of Learning:  
Theory, implication and Practice

# はじめに

## 学習者中心の教育

(Learner-centered ApproachあるいはChild-centered Education)

学習者一人ひとりに、個人および集団の中での経験と体験を拠り所とした考えと、発言する自由および行動の自由が与えられ、豊かな学習資料と構造化された環境の中で、彼らの学習過程の自由度を保証し、一人ひとりの知的、社会的、心的各発達の学習過程を最適化する教育

# Learning: The Treasure Within

(21世紀教育国際委員会編、1996年、ユネスコ、266pp)

- Delorsレポートとしても知られる
- 21世紀における教育の指針
- ユネスコ加盟国を問わず世界の国々に、「学習の4本柱」(The Four Pillars of Education)を、教育を再構築するための基本的な柱と位置づけることを、期待

# 学習の4本柱

## The Four Pillars of Education

- 「知ること」「為すこと」「共に生きること」の3本柱とそこから必然的に導き出される第4の柱「人として生きること」
- 従来の教育、特に学校教育においては第1の柱を極めて重視し、ついで第2の柱を、そして、第3、第4の柱は前2者の当然の帰結か、あるいは偶然の産物と考えていた。



4本柱を同時に重視しながらそれぞれが多くの接点をもち、かつ相互に交差して不可分の一体を成すことを強調

# 教育の基本原則

## ◆ 教育は個人の全面的な発達に寄与すべき ◆

- 精神、肉体、知性、感性、美的感覚、責任感、倫理観等にわたって、生涯学習社会を視野に入れた子どもの発達に、重点が置かれなければならない。
- 先行き不透明でグローバル化し、デジタル化および映像化し、多様化する価値観を共有する、質の向上が求められる競争化する社会の中で、国際的な視野に立っていながらも、国や地域あるいは学校の「宝」の数々を守り発展させ語り継ぐ、特色ある、他とは一味も二味も違った、地球市民としての子どもの誇りに思える学習と教育が求められている。

# 学習の4本柱

## The Four Pillars of Education

学校の教員、市民、父兄を含む家族など、教育の質の向上を求めるすべての人々に活用されることによって、モンゴル国の教育をいっそう活性化し、その改善と持続的な発展のための教育 (ESD、Education for Sustainable Development) を推進する原動力となる。

# 学習の4本柱：背景

Edgar Faure et al., 1972, Learning to Be: The World of Education Today and Tomorrow, UNESCO, Paris, p. vi  
(エドガー・フォール他「未来の学習」1972年、ユネスコ)

人間開発(Human Development)の目的は、個性の豊かさと自己表現や信念の多様さにおいて、個として、家族の一員として、市民として、創造者として、発明者として、そして夢想家としての個人の全き完成にある

- 生まれたときから生涯の終わりまで続く個の発達は、自己を知ることから始まり、自己と他者との関係を築くという対話的  
過程でもある。
- その意味で教育とは、何にもまして心の旅路であり、その里  
程標は絶え間ない人格形成の過程である。
- 教育が社会人として成功するための手段だとすれば、それも  
また極めて個人的な過程であると同時に、社会における  
様々なつながりを築き上げてゆく過程でもある。
- 人生における特定の時期や場所だけに当てはまるものでは  
ない。
- 誰もが生涯を通じて、より幅の広い教育環境から最大限の  
恩恵を受けることができるよう、教育の諸段階や諸領域はも  
う一度再検討されるべきであり、それらを互いに補い合い、  
互いに関わりのあるものとしなければならない。



# 学習の4本柱

## The Four Pillars of Education

Jacques Delors, 1998, Learning: the treasure within, UNESCO, Paris, 83p.-98p.



- (1) Learning to know <知ることを学ぶ>
- (2) Learning to do <為すことを学ぶ>
- (3) Learning to live together, Learning to live with others <(他者と)共に生きることを学ぶ>
- (4) Learning to be <人間として生きることを学ぶ>

# 学習の4本柱

## (1) Learning to know < 知ることを学ぶ >

by combining a sufficiently broad general knowledge with the opportunity to work in depth on a small number of subjects. This also means learning to learn, so as to benefit from the opportunities education provides throughout life.

<十分に幅の広い一般教養をもちながら、特定の課題については、深く学習する機会を得ながら「知ることを学ぶ」>

# 学習の4本柱

## (2) Learning to do <為すことを学ぶ>

in order to acquire not only an occupational skill but also, more broadly, the competence to deal with many situations and work in teams. It also means learning to do in the context of young people's various social and work experiences which may be informal, as a result of the local or national context, or formal, involving courses, alternating study and work.

<多様な状況に対処し、他者と共に働く能力を涵養するために>

# 学習の4本柱

(3) Learning to live together, Learning to live with others <(他者と)共に生きることを学ぶ>

by developing an understanding of other people and an appreciation of interdependence – carrying out joint projects and learning to manage conflicts - in a spirit of respect for the values of pluralism, mutual understanding and peace.

<一つの目的のために、共に働き、人間関係の反目をいかに解決するかを学びながら、多様性の価値と相互理解と平和の精神に基づき、他者を理解し、相互依存を評価すること>

# 学習の4本柱

(4) Learning to be <人間として生きることを学ぶ>

so as better to develop one's personality and be able to act with ever greater autonomy, judgment and personal responsibility. In that connection, education must not disregard any aspect of a person's potential: memory, reasoning, ascetic sense, physical capacities and communication skills.

<個人の人格をいっそう発達させ、自律心、判断力、責任感をもってことに当たることができるよう、「人間としていかに生きるかを学ぶ」>

# 学習の4本柱

(1) Learning to know <知ることを学ぶ>

- 単にマニュアル化され体系化された知識、技術を獲得するのではなく、知識獲得の手だてそのものを習得すること
- 集中力、記憶力、思考力を動員して“いかにして学ぶかを学ぶ”こと

# 学習の4本柱

## (1) Learning to know < 知ることを学ぶ >

- 一つは学習とは単なる情報処理ではない。学習には時間がかかるものであり、注意力をいかに集中するかを学ばなければならない。その方法は、理科の実験、自然観察、ゲーム、企業実習など多種多様である。
- 二つは、記憶力を活用すること。  
情報の処理、蓄積の技術が発達しているが、連想に基づく記憶力という人間本来の能力は人工的な能力によって代替されるものではない。記憶力は幼少時から注意深く育てられなければならない。
- 三つ目の理由は思考力の活用である。  
具体的事象と抽象的事象にまたがるものであることが必要である。学習において具体的思考と抽象的思考、演繹的および帰納的思考力を育てなければならない。

# 学習の4本柱

(1) Learning to know <知ることを学ぶ>

- 知識氾濫の時代に全方位的知識の獲得などは幻想に過ぎない。むしろ特定領域、課題について深く学習するとともに、幅広い一般教養を養うことが重要。



# 学習の4本柱

(2) Learning to do <為すことを学ぶ>

- 「知ることを学ぶ」ことと不可分
- 知識を実践に結びつけること、学習を特定の仕事に結びつけること。



- 例えば、特に産業界における労働形態やサービス産業の興隆からみると、直接モノの生産に携わらない労働やモノを生産しない産業の領域が増えるが、そこでは知的技術的能力以上に労働者の態度、行動にかかわる能力、つまり、マネージメント能力が重視。

# 学習の4本柱

(3) Learning to live together, Learning to live with others  
〈(他者と)共に生きること を学ぶ〉

- 今日の教育の最重要課題の一つ。
- 偏見、差別、抑圧、排除、憎悪、敵愾心、反目、暴力、紛争、戦争そして破壊的危機状態にさえ直面。
- 一方、人権、平和、民主主義、寛容、異文化や価値の多様性認識し、尊重することが、強く主張されている。
- 教育はこのような状態に対して、果たしてどのような貢献ができるのか。
- この現実と理念の溝を埋めるために「共に生きるところを学ぶ」ことが根本において必要である。

# 学習の4本柱

(3) Learning to live together, Learning to live with others  
〈(他者と)共に生きること を学ぶ〉

二つの方法を提言

- 一つは、人には人種、民俗がある。そこには違いはあるが多くの共通点もあり、かつ人々は相互に依存しながら生存している。  
他者を認識し理解することが必要である



まず、自己を知ることである。

他人の身になって他人の反応を理解する。これが他人の属するグループの文化(宗教、歴史、社会、風俗習慣)の理解へと進む。そして、自己および自己のグループの態度、行動、思考の決定づけに有益な要素となる。このためには対話と討論が絶対に欠かすことができない。

# 学習の4本柱

(3) Learning to live together, Learning to live with others  
〈(他者と)共に生きること を学ぶ〉

## 二つの方法を提言

- 第二は、人々がやればそれなりの報いがある共同活動で一緒に行動すれば他人との差異や違いすらその行動の中に隠れ埋没してしまう。
- 違いよりは共通性に考えと心が向かい、そこに新たな帰属意識が生まれてくる。



- 国際理解教育や異文化理解教育の原点が「共に生きる」学習に見いだされ、さらに「知ること」「為すこと」の学習の深い関連を知ることができる。

# 学習の4本柱

(3) Learning to live together, Learning to live with others  
〈(他者と)共に生きること を学ぶ〉

そんなことはユートピア(理想郷)を夢見るものだと言われるかもしれない。しかし、そうやって皮肉に冷笑しているうちに事態は進んで結局は何も為し得ずそれをうのみにしてしまふことになる。

これから脱出するためには夢見るユートピアではなく活かに満ちたユートピアが必要である(と、報告書は、かなり調子を高めている)。

# 学習の4本柱

(4) Learning to be <人間として生きることを学ぶ>

教育は個人の全面的な発展に寄与すべきことを基本原則。



それは精神、肉体、知性、感性、美的感覚、責任感、倫理観等にわたるとしている(日本の教育界でいう全人教育、人格の完成、自己実現過程というのに当たると思われる)。

# 学習の4本柱

## (4) Learning to be <人間として生きることを学ぶ>

- 人はすべて人生のあらゆる場面において、自らが信じる方法によって自らの行為を決定できるように、自主的で批判的な思考発達を遂げるべきであり、独自の判断力を構築すべき。



- 1972年のエドガー・フォール報告書「Learning to Be」の序論:  
「教育はすべての人に、自分自身の問題を解決し、自分自身で決定を下し、自分で責任を負う自由(能力)を持たせなければならない」と主張している(序文、p.xxiv)。



技術の進歩の結果、世界が人間性を喪失するのではないかという危惧

# 学習の4本柱

## (4) Learning to be <人間として生きることを学ぶ>

- 教育の基本的役割は、思考力、判断力、感受性、想像力を賦与すること。
- 個性の多様さや独自性、独創力(initiative)、そして挑発的精神(desire to provoke)すら、これらはみな創造や革新を促す要素。
- 想像力と創造性は自由のもっと明白な表象であり、したがって、21世紀の世界は才能や個性の多様性を必要とするのみならず、通常の枠からはみ出したような人々を必要としている。



- 青少年に対して美術、芸術、スポーツ、文化、社会など、いずれの分野においても発見し、経験することができるように、あらゆる機会を提供すること、そして同時代や先人の創造物に触れさせることが重要。
- 芸術や詩は文化としてではなく、実学的な教育として教えられている。学校におけるこれらの教育もっと重視されてしかるべきであるが、多くの国ではそうになっていないのが現状。



# 学習の4本柱

(4) Learning to be <人間として生きることを学ぶ>

- 教育の基本的役割は、思考力、判断力、感受性、想像力を賦与すること。



- 想像力と創造性を発達させたいというからには、大人・子どもを問わず経験に基づく話し言葉による文化や知識に対しても、相応の留意をするべき。

# 学習の4本柱:適用例(1/5)

- 授業の目標は何か、が不明確・・・もっと明確にすべき。

たとえば、「アルゴリズムを勉強します」ではなく、「いろいろな事柄に『順序』があって、これを『アルゴリズム』と呼ぶこと、というような、名前はあとからで良い（勝手に、そう付けているという程度）。そして、発達段階に従えば、やや抽象的な図案化あるいは記号等で表すことによって、誰にでも分かり、「協力」したり、「仕事を分担したり」することが、比較的容易であること、効率的であることなど、児童と一緒に話し合う時間が、先ず、必要。



したがって、授業の目標は、「アルゴリズムを勉強します」ではなく、「仕事の順序の表し方にはいくつかあり、そのうちの2つ「言葉で表現すること」「ブロック図で表現すること」を知り、この2つを比較することによって、後者が誰にでも分かりやすく、協力や仕事の分担に便利で、効率的であることが言える」。さらに、「与えられたブロック図を、正しい順序に並べることができる」が、望ましい。

# 学習の4本柱:適用例(2/5)

- また、先生が「これから言うことを、ノートに書いてください」ではなく、……



授業で書かせていた例で言えば、ジョガイモとクリームでサラダを作るとして、「あなたなら、どうする?」「そう、買い物に行く」「そうですね、買い物に行きますね」「では、買ってきました」。では、次は、どうする?」「……」という、子供との会話を楽しむ。そして、それを黒板に書いていく。最後に、「では、黒板に書いたことをノートに書いてください」という指導の方が、「子供中心の学習」に近くなる。

# 学習の4本柱:適用例<sup>(3/5)</sup>

## 担当教師が手を抜く授業、太れる授業

- 「構造化され、授業の目標についての知識を与えていて＝Intellectual＝、良い授業であったこと」「ただし、担当の先生は痩せているが、もっと手を抜けば、太れます。



そう、太れる授業を心がけて良い。つまり、子供と対話を楽しむこと。子供に発言する機会を与えること。そして、隣の子供の考えと自分の考えの相違、価値観の相違＝Four Pillars of Learning取り入れて欲しかった」

**先生が手を抜く授業、先生が太る授業！**

# 学習の4本柱:適用例<sup>(4/5)</sup>

- 袋を配って、中に準備してきていたブロックチャート図を、グループで並べさせたのはGood。しかし、何のため？……



グループで活動させる限り「みんなで相談して、協力して、並べてごらん？」と言えば、グループで活動させた意味が出てくるし、Four Pillars of Learningを意識したことになる。

# 学習の4本柱:適用例<sup>(5/5)</sup>

なお、指導書にこの例を書くとすれば、指導書欄外に、「ジャガイモクリームのは、一例で、学校と子供の実態に応じて、彼らにとって身近な順序を考えさせることのできる事例、できれば地域独特の料理などの事例を取り上げることが望ましい。そして、むしろ多様な方法があってよいこと、間違えることは悪いことではないこと、つまり、Errorfull Learningの認識が必要である。」と記すと良い。

# 学習の4本柱:適用例(1/1)

- 宿題について、「コンピュータに面白い話が入っているから次回はそれを」というのは、既存のソフトなので、当該の学校らしさ、担当の先生らしさが出しにくい。



- そこで、…例えば、この校長室の壁にはあってある額「8頭の馬」を持って行って、「この話を知っている?…自宅に行って、ご家族の人に聞いたり、図書室で調べたりして、簡単にまとめて、ノートに書いてきてくださいね。次回は、それを発表してもらい、そして、入力してみましよう」とすれば、先生らしさ、モンゴルの古い話、家庭との連携などに発展できて、良い。

なお、校長先生によれば、このj学校は、朝青龍と因縁が深いという。それを取り上げてても良いであろう。

# 学習の4本柱:適用例(1/1)

- 「まとめの段階」で、宿題として、「キーボードの紙を自宅に持ち帰って、よく見ておきなさい」ではなく、



- 「ご家族の人に、今日、授業で行ったチンギスハーンのお話を聞いて、まとめてきてください」あるいは、「モンゴルの美しい川の詩などを、ご家族の人に聞いて、ノートに書き、タイプの練習をして来てください」とすれば、いっそうGood!
- つまり、宿題を、児童生徒の学力等によって、「なぞり」「発展」と2つに考えて置くことが重要!



# 学習の4本柱と子どもの発達

## (第一次案)

子どもの発達		Learning to know				Learning to do		Learning to be				Learning to live together					
		幅広い一般教養の学習	知識の獲得手段の学習	労働のための技能	他者との交流・協働の技能	職業訓練	知識と実践の結合	他者とともに働く	自主的・批判的な思考	独自の判断力	自律心	責任感	記憶力・推理力・美的感覚・ 人体的能力・コミュニケーション能力	他国民・文化・価値観への敬意	多様性の価値と相互理解と平和精神	人間関係の反目の解決方法	他者理解と相互依存
Intellectual	Piaget/Vygotsky																
	数・知覚・言語 空間・記憶・言語の 流暢性																
Social	他者との感性的 結びつき(愛着)																
	基本的生活習慣/ 適切な行動 役割/ 社会的スキル																
Emotional/Motivation	達成動機 (やる気・意欲・ 成功と失敗の恐れ)																
	情緒 動機付け																

# 終わりに当たって

- 私の考える「良い授業」「優れた授業」とは、周到に準備された指導案によって実現する可能性が高い。
- 「指導案」に記述される重要な要素は
  - 明細化され構造化された目標
  - 明確な「教授ストラテジー」
  - 「学習ストラテジー」
  - 「選択されたメディア」
  - 「形成的あるいは総括的評価の視点」
- そして、「楽しい授業」であること
  - 「知的好奇心」を高める

Thank you for your attention  
and . . . .  
your patience!